

せめて 息抜き

余りにつまらない政治・外交の世界に辟易して
安息の片隅を求めてく・・・

以前、このサイトで触れたことがあつた小料理屋「福○内」。車道に沿つた舗道から少し奥まつて構える店舗。店前には、店名を染めた大きめの暖簾が斜めに庇のように掛かっている。

入口ドアを開けると直ぐ、年配の男性が「こやかに奥に案内してくれる。その店内は洋風だが、履物は脱ぐことになっている。入つて直ぐ左側のバー風カウンターが奥へ誘うように設けられており、カウンターの内側には厨房があつて、息子と同じような年恰好の板前さんがちよこんと頭を下げて出迎える。

そしてカウンター前の廊下の奥に、四卓四人掛けのテーブル席があつて、かなり年配の女性がにこやかに出迎えてくれる。従業員はその三人のようである。

予約していたので、奥の四人掛けテーブルへ案内された。さつそく新聞大の黒板のようなメニューを二枚、先ほど出迎えてくれた年配の男性が持つて來た。一つはおつまみはじめ料理類、も一つはほぼ日本酒のアルコールのお品書き。

初の来店ということで、自己紹介となつた。

年配の男性が「主人である。

名刺を頂きながら、先ず同じ年ということが分かつた。名刺にはこの辺の自治会や防災の役員、近所の神社役員の肩書があり、この辺の名士のようである。

結構饒舌といふのか、サービススタッフだから当たり前だろうが、積極的で誘導尋問を受けるように、先ず「ちら三人の間柄、僕らの住む場所、現役の頃の職業など・・・喋つてしまつていた。伺うと、サービス担当のお二人は「夫婦で、板前さんが息子さ

ん。つまり店側と客側の僕らはまさに年格好も同じような家族構成で、『近所。途端に親近感が沸くもので、一気に座はなごんだ。

いつの間にか、『主人はお酒なのか？グラスを手にしている。僕らのテーブルの脇に座って、まさにお客様然としているのだ。いわば、昔のキャバレーやサロンなどでお客の脇にデンと座つて接待するサービスなのだろうか。こうして外に飲みに出ることは何十年か振り、浦島太郎になつたようで、勝手がわからない。

その時、サービスヤードの奥まつたところから、暇なく客席を回っていた、もう一人のスタッフである奥様が、今はお客様になり切つているような『主人に鋭い視線を送つてゐる。何となく申し訳ないような気分とともに、内部を覗いてしまつたような一瞬だつた。

しかし、『主人は一向に気にしてない様子だ。いつものことなのだろう。マイボトルで着席して、すっかり場の中に溶け込んでしまつてゐるような『主人がまとつた雰囲気では、奥様は入つてくる余地がなさそうだ。

やがて、品揃え自慢のお酒と料理が登場することになる。

・ · · · · · · · · · ·

これは僕が少し元気な去年のことで、酒抜きの小料理を愉しんでいた。その後体調がすぐれず無沙汰しているが、折角の馴染店になりかけていたところで、この愉しみのためにも何とか踏ん張らないと。

なお、都心に通う息子殿は、わざわざ職場の仲間を遠いところから呼んで集つてゐる。その彼によれば、都心とは比べようがないほど料理の内容は上等で、だいたい値段が違う。比較にならないほど当店の方が安い、という。